

【会員だより】

育児と育種を両立するには

福田 陽子

林木育種センター本所から北海道育種場へ転勤して、はや10年が経つ。この間、2人の子に恵まれたものの夫が単身赴任になり、公私のバランスを取りつつ北海道の林業に貢献する道を求めて、手探りを続けている。時間の制約が大きいことも勿論だが、目下の悩みの種は、検定林調査を始め、宿泊を伴う出張が難しく、現場を見る機会がなかなか得られないことだ。シンポジウムやセミナーへの参加もままならない。しかし、昨年4月に育児休業から復帰してこの1年、時の流れも味方して、制約のある中で何ができるかヒントが見えてきた気がする。

転勤してきた当初担当したのはアオダモの遺伝資源管理に関する課題で、新たな研究に取り組む楽しみはあったものの、人工交配により次世代集団を作り出すという最も夢のある仕事から遠ざかってしまった。センター本所では花粉症対策を担当していたので、より花粉生産量が少なく、林業特性にも優れた品種の創出を目指して交配計画に思いを巡らせ、実行するのは楽しい作業であった。しかし北方樹種ではみな、着花促進技術が確立されていない上に樹形が低く仕立てられた交配園がなく、人工交配が容易ではない。とは言え、「このままでよいのか?」という思いがよぎり、時おり国内外の着花促進に関する論文に目を通しつつも、担当課題が最優先で他のことを手がける余裕はなかった。

それから数年、職場復帰した今、北海道育種場でも第二世代精英樹の選抜が進み、着花促進と次世代化が大きな課題となっている。検定済みの第一世代精英樹が少ないため、それを補完するために場内の試験地で蓄積された調査データも活用しながら、優れた特性をもった第一世代精英樹を選び出して交配し、育種母集団の幅を広げる計画もある。着花促進技術の研究や交配作業もさながら、足元にある試験地を隈なく知ることができ。「裏山の大将」の野望を胸に、まずは来春、有望なクローンの花粉収集から着手したい。着花の豊凶の不安はあるが、雪融けを楽しみに待つ今日この頃である。(ふくた ようこ、森林総合研究所林木育種センター北海道育種場)

北進するブナを山スキーで

追いかける

北村 系子

ブナの地理的分布北限が北海道渡島半島にあることはご承知の向きが多いかと思う。現在ブナは北進中との説が有力ななか、2013年に最北限最前線のブナがニセコ山系で発見された。実生も含めた総個体数がおよそ150個体のごく小さなパッチで、最寄りのブナ林から10km以上も離れている奇跡のブナである。発見当初は「箇所あったのだから周りにもあるだろう」と軽く考えていたが、探しても探しても周囲に他のブナは見つかっていない。ニセコ山系は北海道の山の例にもれずササの藪で覆われ夏季の踏査は困難を極めるうえに、ヒグマの生息域であることから野営も危険を伴う。ところが、冬のニセコは世界に誇るパウダーゾーン、つまり日本有数の豪雪地帯でササは雪で覆われてしまう。そこで、春に雪が締まって歩きやすくなった頃、山スキーの機動力を生かして広域を探し回る調査を行っている。雪の上を滑っていける山スキーは夏に比べて何倍も早いスピードで移動できるうえに、冬は見通しがきくため対岸の森も双眼鏡で観察することができる。ただ、葉がないので樹種の判断は、樹形、幹の色、枝先の形、芽の形などブナを見慣れていないとなかなか難しい。よく間違える樹種の代表はハンノキ、カエデ、ダケカンバである。雪上踏査は今年で3回目になるが、残念ながらまだブナは見つからない。ただ、登山道がまったくない地域をさまよって歩いているとびっくりするような巨木林に出会うことがある。ニセコ山系でエゾマツとアカエゾマツの巨木林が森林限界直下に発達していることはほとんど知られていないのではないだろうか。ニセコ山系は人里に近く、スキー場開発だけでなく歴史的にも松前藩やニシン漁による伐採が行われた地域という先入観があったが、ここまでの巨木林を見ると豪雪とササが人の侵入を制限して原生の自然がまだまだ残っていることがよくわかる。実際に、他の地域よりもクマガラやエゾライチョウに出会う頻度も高く、雪上の調査ならではの楽しみ、つまりスキー滑降も爽快である。ブナが見つからなくても「来年こそ!」とモチベーションは上がる一方である。



写真-1 2016年3月の調査。ニセコ山系を山スキーで踏査するメンバー（左から佐々木尚三、田中伸行、筆者）。背景左遠方が積丹半島、背景右端の海岸に泊原発。

(きたむらけいこ、森林総合研究所北海道支所)